岐阜市立女子短期大学研究紀要第54輯（平成17年3月）

杭州の洞窟聖地とその信仰について　Ⅰ

Holy Caves and these Beliefs in Hangzhou Ⅰ

須　永　敬

Takashi SUNAGA

Abstract

As is well known, the provincial capital Hangzhou of Zhejian province was the capital of South-Song in the 12th to 13th century. Many priests of Japan and Korea went over to South-Song. Therefore, an understanding of holy caves and these beliefs of Hangzhou lead to an understanding of holy caves and these beliefs throughout East Asia. If a comparative study of holy caves and these beliefs in the Japanese Islands, the Korean Peninsula, and the China continent can be done, it will contribute to the development of the religious cultural studies of East Asia. In this paper, the religious culture of holy caves in Hangzhou (Huanglong-dong, Bianfu-dong, Ziyun-dong, Qixia-dong, Xianshan-dong) are reported and analyzed.

の

Keywords : 洞窟・聖地・龍・水・観音

はじめに

筆者は近年、日本列島・朝鮮半島の山岳聖地の踏査・研究を実施し、その成果を公にしてきたが〔須永　2003 a、2003 b〕、その研究を通じて、東アジアの民俗宗教における洞窟聖地の持つ重要性を意識するに至った。たとえば日本の修験道でいえば、英彦山四十九窟、戸隠三十三窟などに代表されるように、山岳の洞窟聖地が数多く存在している。また地域の民俗宗教を考える上でもその土地の洞窟が信仰上大きな意味を有している場合が少なくない。同様のことは朝鮮半島についても言うことができる。

ところで、以前ある研究会で沖縄の神社信仰と洞窟祭祀の口頭発表を行なった際、沖縄の洞窟祭祀と九州の英彦山や朝鮮半島の山岳宗教・洞窟祭祀との影響関係の可能性を指摘したことがあるのだが、その席上、宮家準氏より「沖縄の場合にはむしろ中国との影響関係も含めて考えるべきではないか」とのご教示を賜った。たしかに、歴史的にも琉球列島と中国大陸との関係は深く、中国大陸の洞窟祭祀への理解を深めることの必要性を感じたが、さらに言えば、それは琉球列島にとどまらず、朝鮮半島や日本における洞窟祭祀を考える上でも、重要な点ではないかと考えるに至った。

幸いにして、2004年7月に本学国際文化学科と中国杭州市の浙江工業大学外国語学部との交流協定が結ばれ、さらに同年９月には本学国際文化学科の「海外言語文化演習（中国）」のために杭州市に滞在する機会を得た。その際、杭州市内に多数の洞窟が存在し、その多くは今日も信仰の対象となっていることを知り、いくつかの洞窟を踏査することができた。帰国後、その踏査記録を整理するとともに、さまざまな資料を渉猟していくうちに、洞窟祭祀が中国の宗教文化を考えるうえで重要なものであると確信するに至った。

浙江省の省都杭州は、マルコ・ポーロの『東方見聞録』からも知られるように、古くは南宋の都「臨安」として栄え、経済・文化の一大中心地であったとともに、東アジア仏教文化の一大拠点であり、日本・高麗の僧や商人が多く行き来していた。その杭州が中国有数の洞窟聖地を持つ地域であったということは、海を渡ってここを訪れた日本や高麗の僧たちも中国の宗教文化の一部として当地の洞窟祭祀に触れ、場合によってはそれを範としたと考えるのは決して不自然なことではない。とすれば、彼らの帰国先であった日本・高麗の宗教文化を考えるうえでも、これらの洞窟の理解を深めることの意義は大きいはずである。

日本列島、朝鮮半島、中国大陸における洞窟祭祀の比較研究が可能となれば、それは東アジアの宗教文化研究に一石を投じるものになりうると考える。無論、本報告は、駆け足で行ったごく短期間の踏査に基づくものであり、調査もいまだ十分な段階ではないが、日本ではあまり報告されたことのない中国の洞窟聖地とその現況を公表することは、今後の東アジアの聖地研究に新たな資料と視点を提示するという意味において意義ある試みであると考える。

１．中国と洞窟聖地

中国における洞窟聖地といえば、敦煌莫高窟や龍門石窟の名

がすぐに思い浮かんでくるであろう。洞窟は中国の神仙思想・道教・仏教といった宗教文化を考えるうえで欠かせない要素となっている。しかし、日本において紹介される洞窟聖地はほんの一握りの代表的なものであり、多くはその芸術性について審美的視点から論じられている観がある。また、宗教文化・文化史研究の中心的な議題からも逸れてしまっているきらいがある。中国の宗教文化を知る上でも、また東アジアの宗教文化を知る上でも、このような洞窟聖地の研究がより一層深められる必要があると考える。

近年、中国においては洞窟に関する著作が次々に刊行されており――無論仏教美術に関するものがほとんどであるが、一般の書店でも入手することができる。たとえば、最近出版された『中国名窟名洞辞典』〔王　2003〕には、中国大陸部だけでも316箇所（項目数による）の大小さまざまな「名窟」や「名洞」が紹介されている。これだけの数の「名窟」や「名洞」のほかに、同書に挙げられなかった洞窟を含めると、中国大陸部のみでいくつの洞窟が存在するのだろうか、またそれぞれの洞窟が過去から現在に至るまで、中国大陸に暮らした人びとの宗教文化とどのような関係にあったのであろうか。このような課題については未だ明らかにされているとはいいがたい状況にある。

同書に挙げられた洞窟数の分布を調べると、さらに興味深いことがわかる。各政府直轄市・省ごとにその項目数を上げれば、北京市（10）、天津市（1）、河北省（8）、山西省（16）、内蒙古自治区（1）、遼寧省（2）、吉林省（1）、黒龍江省（2）、江蘇省（11）、浙江省（74）、安徽省（12）、福建省（36）、江西省（11）、広西壮族自治区（35）、海南省（1）、重慶市（10）、四川省（11）、貴州省（23）、雲南省（14）、西蔵自治区（2）、陝西省（12）、甘粛省（11）、青海省（1）、寧夏回族自治区（3）、新疆ウイグル自治区（8）となる。

ここで目につくのは、浙江省の群を抜く洞窟数である。中国の洞窟として日本で一般にイメージされるのは、中国内陸部の巨大な洞窟群であろう。しかし、本書項目の実に4分の1弱を占めているのは浙江省の洞窟なのである。もちろん項目数の多寡によってのみその重要性を決め付けることはできないにしても、浙江省はまぎれもなく洞窟聖地の一大拠点となる地方であったといえよう。そして、その浙江省のなかでも最も濃密に分布しているのが「西湖群洞」のある杭州市であり、同書だけでも11洞窟の記載がある(1)。

杭州の洞窟聖地については、早くに常盤大定の踏査記録が公刊されており〔常盤　1972、1975〕、石屋洞・煙霞洞の2ヶ所および霊隠寺の飛来峰の洞窟群について報告がなされている(2)。また、本稿でも西湖北側の5つの洞窟聖地を紹介する。しかしながら、杭州には先述のとおり数多くの洞窟聖地が存在している。このうち筆者が踏査したのは杭州の一部の洞窟聖地でしかないし、本稿で紹介するのもさらにその一部でしかない。このような状況のなかで「杭州の洞窟聖地」を論文の表題に掲げることに若干のためらいがあるのも事実だが、本稿の目的が、このような洞窟聖地の存在を広く紹介することによって、今後の諸分野における宗教文化研究に問題を提起することに置かれていることをここに示すとともに、その不十分な点については今後随時情報を補っていくことにより、その責を埋めたいと考える。

2．西湖北岸地区の洞窟とその祭祀

西湖北岸地区には、黄龍洞・蝙蝠洞・紫雲洞・栖霞洞・香山洞・金鼓洞・臥雲洞・川正洞の8つの洞窟がある。このうち今回踏査を行なったのは、黄龍洞・蝙蝠洞・紫雲洞・栖霞洞・香山洞の5箇所である。ここでは、これらの洞窟を個別に論じることにより、それぞれの洞窟の特徴を検討してみたい。

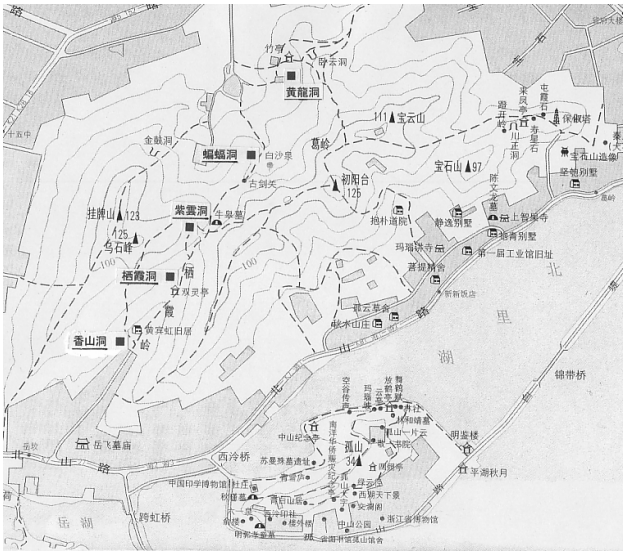

図1．杭州西湖北岸の洞窟群（原図は〔馬（編）2003　26〕）

a．黄龍洞（Huanglong-dong）

黄龍洞は、伝統的庭園として1995年に整備された観光地「杭州黄龍洞円縁民俗園」内に位置している。中国の「縁」文化をテーマとするこの庭園には、恋人たちのためのモニュメントや結婚式場などが設けられており、伝統的婚礼用具なども展示されている。特に人気を集めているのが縁結びの神である月下老人を祀った月老祠であり、恋占いのお御籤を引く観光客の波が絶えない。

庭園内には、これといって目を引く洞窟はない。月老祠裏手の東屋の背後（写真1）や築山の中腹に、小さな人工の洞窟が作られており、あるいはこれが黄龍洞かとも思われたが、規模が小さすぎることや、確信に足る資料が得られなかったことから不明としておく。ただし、「洞」という名を持つことが、

必ずしも洞窟を示さないという事例は日本や韓国にも例のあることであり、仮に洞窟が無かったとしてもそれほど不自然なことではない(3)。

黄龍洞のメインシンボルとなっているのは、黄色い龍頭から

写真１．黄龍洞東屋背面の洞穴

写真２．「杭州新西湖十景」のひとつ「黄龍吐翠」

流れ落ちる滝である（写真２）。これが「杭州新西湖十景」のひとつ「黄龍吐翠」である。これは近年作られたものと思われるが、この黄色い龍にはこれから述べる黄龍洞の由緒が投影されている。

明代の『西湖游覧志』には黄龍洞について次のような記述がみられる。

> 護国仁王禅寺、宋淳祐間、経略花園使孟珙建。自其趾斗折而上、有洞豁豁、深杳莫測、水泉紺凛、旱不縮而潦不盈、有龍居焉。故老相伝、曩夏雨初霽時、常有神物蜿蜒臥松上、其気茀茀然而黄、盖黄龍也、故世号黄龍洞。珙既建仁王寺、并作龍祠、延高僧慧開居之。属歳又旱、理宗召慧開祈雨、退而默坐。帝遣内侍問之、対曰、寂然不動、感而后通。既而大雨。自是無雨輒祷、祷輒応、遂封黄龍為霊済侯、賜祠額曰護国龍祠。元至正毀。洪武初、僧祖吉重建。其東有黄山橋、塢内有天龍庵、永安院、西靖宮、並廃。
> 〔『西湖游覧志』巻九〕

この由緒によれば、当地を訪れた宋の名将孟珙（－1246）が、計り知れないほど深く、中には枯れない泉をもつ洞窟を見つけ、龍の棲むところではないかと思った。老人の話では、去る夏の雨が止んだとき、蜿蜒が松の上に現れ、黄色い気を出しており、きっとこれは黄龍に違いないということで、黄龍洞という名がついたという。孟珙が仁王寺を建てた際に、龍祠もあわせて作り、後に僧慧開（1183－1260）がここに住み、祈雨の霊験があったことを記している。

また他の由来として、次のような説話もある。江西黄龍山の高僧慧開がここにやってきて庵を結んだ際、ある日雷鳴が地を震わせると、山の後ろの岩が龍の嘴のように裂け、そこから清泉が流れ出した。人びとは黄龍が慧開に付いてここまで来たのだと云い、これを黄龍洞と名づけた〔王　2002　60〕。

さて、黄龍洞の伝承にたびたび登場する慧開は、宋代の禅宗の僧侶で、淳祐６年（1246）に勅旨を受け、杭州の護国仁王寺を開くとともに、同年宮中で雨乞いの祈祷を行い、仏眼禅師の号を賜っている〔下中（編）　1985　a　267〕。ちなみに、彼が著した『無門関』（1228）は、古くからの公案48則をまとめたもので、日本へは建長６年（1254）という早い時期に、和歌山興国寺の開山、覚心（法灯国師）によって持ち帰られ、当時最新の禅宗知識をもたらした文献であった。禅宗の入門書として今日も広く読まれている。

また、黄龍洞には蛇・龍や雨乞いの伝説もみられる。『西湖游覧志』には、この龍は雨乞いの霊験により皇帝から「霊済侯」に封ぜられ、護国龍祠の額を賜ったと記されている。このような記述からも、黄龍洞には宋代きっての名僧慧開と、雨乞いの伝説、蛇・龍への信仰を伴いながら伝承されてきたということができる。

また、杭州で伝えられる伝説として、小黄龍の話がある。少し長くなるが、後ほど述べる紫雲洞とも関わるものでもあり、その概略を紹介しておきたい。

> 昔、紫雲洞に老黄龍と小黄龍の親子が住んでいた。あるとき小黄龍が地上をみたいと思い、人間の姿に変じて麓へと降りていった。すると、「火龍への供物を地主に差し出すことができず、供物の代わりに自分が生贄にならなければならない。」と嘆く人びとに出会う。この火龍とは老黄

龍のことである。自分の親によって悩まされている人びとを不憫に感じた小黄龍は、供物のかわりに自分の鱗を剥がし、金として地主に差し出すように言う。

沢山の金が手に入り喜んだ地主であったが、金を溶かして大金貨を作ろうとするやいなや、鱗の金は火を呼び、火炎を吹き上げ、たちまちにして地主の家を焼き尽くしてしまった。この煙の臭いに気づいた紫雲洞の老黄龍は、さては小黄龍の仕業と怒り狂い、杭州の城内外を火の海にしてしまった。全てを焼かれた人びとは火龍を怨み罵り、小黄龍ももはや自分の親が人間に迷惑をかけるのを放ってはおけない。

ついに小黄龍と人びとは、火龍を退治しに行くことになった。小黄龍は西湖の水を人びとに汲ませ、それを紫雲洞へと運ばせた。水は紫雲洞へと流れ込む。老黄龍は火龍であるから水は大の苦手である。老黄龍も猛火を吹いて対抗したが、遂に力尽き、水の中で息絶えてしまった。また、人びとの指揮をとっていた小黄龍もまた火龍である。この攻防で全身に水を浴びて倒れ、元の龍の姿に戻って死んでしまった。

人びとは小黄龍を葬り、その山で毎晩泣いた。人びとの涙は墓土に滲みて小黄龍の胸に流れ込み、胸を溢れた涙は口から流れ、墓土の間から滝のように流れ出た。この水はいまも湧き続け、後に人びとが黄輝石で龍頭を刻み、龍の口から水が流れ出るように造った。地元の人はこれを黄龍洞と呼んでいる。〔杭州市文化局　1992　50-56　を基に筆者が要約〕

b．蝙蝠洞（Bianfu-dong）

今回取上げた洞窟のうちで最も資料や情報の少ないのが、黄龍洞から紫雲洞へ至る途中にある蝙蝠洞である。洞窟は巨大な岩が合掌したような形で、入口は狭いが中は広い（写真３・４）。奥行きも30m以上はあろうと思われる。最奥部は上方へ向かった穴が開いており、空を望むことができる。この周辺の洞窟と比較しても中規模な洞窟と言ってよい。

蝙蝠洞には、他に見られるような祭壇や祭祀の跡はみられない。この洞窟の特徴の一つとして、他に見られるような洞内の水場がないということが挙げられる。本洞窟が祭祀の対象と考えられていないことには、あるいはこの点が関係しているのかもしれない。なお、洞内は暗く湿っており蝙蝠が多いので蝙蝠洞の名がついたとされる〔王　2002　61〕。

c．紫雲洞（Ziyun-dong）

『湖壖雑記』（19C末）に「栖霞峰上有五洞、紫雲最奇。」とあるように、紫雲洞は、栖霞峰で最も大きな規模をもつ洞窟であり、全長は約100mに達する。

『西湖游覧志』巻九には「紫雲洞、在峰嶺、去妙智庵数百歩許。倚空如懸、陰涼徹骨。」と記され、明代の『西湖臥游図題跋』には文人がこの洞窟に遊んだ様子が記されている。また、『春在堂随筆』には次のような記述がある。

写真３．蝙蝠洞の入口

写真４．蝙蝠洞内部から入口方向を写す

惟紫雲洞极有致、其前洞広修可百筵、中間一径才通人、石巉岩可畏、俯首而入、犹惧触額。既入、則豁然開朗、与前洞等。内鑿仏像数躯、且有泉水注崖石間、泠泠然。僧言此中可銷夏、六月中、游屐相続、此時尚早也。張平子云、幽谷響嶺、夏含霜雪。信夫。〔『春在堂随筆』〕

このように、避暑地、旅遊地として紫雲洞の名は知られていたようである。

洞窟入口には観音像の祀られた観音殿があるが、この観音殿自体も岩壁にできた洞穴である（写真５）。観音殿の左手に紫雲洞へ通じる石段があり、そこを降りていくと最初の一室に通じる。ここにはテーブルや椅子などが置かれている。『春在堂随筆』（1899）には「僧言此中可銷夏、六月中、游屐相続。」と

記されているが、夏の暑い日には今もここで涼をとる人がいるのだろう。

さらに洞窟は細い廊下状となりながら奥へと続いているのだが、その途上にはいくつもの小さな岩陰があり、そこには蝋

写真５．紫雲洞入口の観音殿

燭や線香など祭祀の形跡が認められる。同行者の話によれば、恐らく家庭に祀られている小さな観音像などを洞窟に持参し、この場所で祀った跡であろうと言う。洞窟の奥に進むと右側の岩壁が無くなり、光の射し込む明るい岩陰のような形状となっている。最奥部には岩壁を円形に刳り貫いて作られた紫雲宝殿が東を向いて設けられ、そこには四方三聖の立像３体が祀られている（写真６）。その左には小さな祭壇が設けられ、地蔵菩薩が祀られている。さらにその左の岩陰には七宝泉という泉が湧いている。先の『春在堂随笔』に「内鑿仏像数躯、且有泉水注崖石間、泠泠然。」と記されているのも、この七宝泉のことである。

紫雲洞については、旅遊地、避暑地としての記録が多いが、『春在堂随笔』の記述からは、ここが仏像を祀り、かつ泉の湧く洞窟であり、その祭祀には僧が関与していたことがわかる。杭州の洞窟の多くも、廟や寺院といった宗教施設を伴っていたものが多い。しかしながら、本稿で紹介した他の洞窟と同様、現在の紫雲洞において僧侶や道士の姿を見ることはなかった。今もなお、このような洞窟祭祀の指導的な立場にあるのは彼ら宗教者なのであろうが、組織的・集団的というよりは、むしろ信者の自発的・個人的な信仰心に支えられて祀られているという印象を受ける。

ところで、先の黄龍洞の項でも触れたように、この紫雲洞には龍が棲んでいたという伝説がある。洞窟には龍が棲むという観念が杭州の人びとにあったことを示す事例として留意しておきたい。

写真６．紫雲洞最奥部に設けられた紫雲宝殿

ｄ．栖霞洞（Qixia-dong）

現在の栖霞洞は、幅323.5×高さ186×奥行263（単位はcmでいずれも最大値）の、小さな洞窟である（写真７）。洞窟の口は南南東を向いて開いている。写真には、洞窟内やその周辺でテーブルを囲み、麻雀やカードを楽しむ人が写っている。ここで涼をとりながら、休日を楽しむ地元の人びとも多い。また、写真からも確認できるように、洞窟入口左側には、幅138×高さ80×奥行28（単位はcmでいずれも最大値）の半円形に削られた祭壇が設けられており、布袋の姿をした弥勒仏像をはじめさまざまな仏像が10体祀られている。いずれも小型で市販されているような仏像であり、家庭に祀っていた仏像を何らかの理由でここに祀ったのだと思われる。

洞窟の前庭には、かつて「栖霞廟」があり、そこには百人以上の僧侶がいたと伝えられている。確かにその場所には方形（380×642cm）に石が敷かれ、表面がセメントで覆われており、その中央部には香を焚く長方形の壇が設けられている。これらとかつてあったという栖霞廟との関係の有無は不明であるが、このような前庭の設えは杭州でもあまり例を見ないものである。なお、後述の『咸淳臨安志』には妙智寺という寺院の側らに栖霞洞（棲霞洞）があると記されているが、この妙智寺が栖霞廟の前身であった可能性もある。

この石畳の傍には井戸が設けられており（写真８）、どんな渇水の時にも水を汲むことができるという。もちろん飲むことはできないのだが、手を洗ったり涼をとったりと思い思いに使われている。後述の資料にはこの洞から百余歩の所に「水洞」があると記されている。残念ながら今回はこの水洞を探すことはできなかったが、いずれにせよこの土地が豊富な地下水を有していることは間違いない。

栖霞洞の内部には、小さな石造の祭壇（幅184×高さ78×奥行62㎝）が設けられており、そこに観音像９体と関羽像とおぼしき１体が無造作に並べられている（写真９）。これもやはり市

写真７．栖霞洞と前庭　かつてここに栖霞廟があったという

写真８．栖霞洞前の井戸

販されているような小型のものであり、元は家庭で祀られていたものが持ち込まれたと考えられる。

紫雲洞などとは違い、観光客もあまり来ない場所だが、毎月陰暦１・15日には多くの参拝者が訪れるという。散らかった線香や蝋燭の跡などを見るとその数も少なくないように思える。また、この洞にお参りをすると蚕がよくできると言われており、蚕の成長期とされる陰暦正～２月にかけて、上海や紹興のほうから養蚕関係の仕事をする人たちが何百人もお参りに来るという。

また、栖霞洞の伝説として、宋代に金兵に追われた小康王がこの洞窟に逃げ込んで隠れたという話が地元の人々に伝えられている。小康王とは、後に即位し、宋の高宗（1107-1187）となる人物である。

また、『咸淳臨安志』には南宋末の宰相、賈似道（1213－1275）と栖霞洞（棲霞洞）の関係が記されている。

写真９．栖霞洞内部の祭壇

> 棲霞洞　在棲霞嶺巓、妙智寺側。其地多巖石、蔽翳榛莽中。今　太傅平章賈魏公、来游望而異之、命施畚臿、倏見奇状、抉蔵剔幽、千態溢発、殆若神剜鬼鑿地霊宝閟有。待而後顕者洞之外、為亭二、曰暢亭、曰瀹俗。入其中、穹然如夏屋、隻巨石相倚為閉閎。毎風従南来、谽谺而出軋悽神寒骨、不可久立、故暑游最勝。其右甓小方台、突然坎窞中、衡従二石、級下達於坻、厥土乃剛燥益、南仰視左竇、四五豁然通明、大者円径丈許、嘉木当前如月中桂、小者星列自相附属。出洞略亭而北行百余歩、有曰水洞、循而下可十余丈、受泉一泓、深不可測、極甘洌。　魏公嘗調以瀹茗。〔『咸淳臨安志』巻二九〕

ところで、この栖霞洞で興味深いのは、この小さな洞の裏側にさらに大きな洞がある点である。これについて『咸淳臨安志』には記述がみられないが、明代の『西湖游覧志』には次のように記されている。

> 栖霞洞、在妙智庵左、地多怪石、隠翳榛莽中、賈似道望而異之、命施畚臿、倏見奇邃、乃抉蔵剔幽、為亭曰暢、曰鑰俗。入其中、穹然如夏屋、雙石相倚為閉閎。風從南来、谽谺而出、寒骨凄神、不可久竚、故暑游最勝。石甓小台、突然坎中、衡二石、下達于坻、仰視左竇、四五通明、大者円径丈許、有水、洞深不可知測。頃者、悪僧以游人之多、塞総垢径、僅余丈尺耳。〔『西湖游覧志』巻九〕

また、同様の話は清代の『湖山便覧』にも記されている。

> 栖霞洞　在峰上。洞如厦屋、雙石相倚為門、陰涼徹骨、暑游最勝。宋賈似道搜得榛莽中、抉蔵剔幽、千態溢発、乃于

洞外為亭二。曰暢亭、曰瀹俗亭。其左甓小方台、縦横二石級、下達于坻、仰観石竇四五、豁然通明、大者円径丈許。出洞百余歩、又有水洞、泉极甘冽、似道嘗取以瀹茗。明末、俗僧以游人之多、取土塞之、僅余丈尺。（この後、李彦弼、呉太冲の詩文を紹介――筆者注）〔『湖山便覧』巻五〕

このように、かつては大きな洞窟であった栖霞洞を、遊人が多いという理由で塞いでしまったというのである。その時期は、『湖山便覧』によれば明末であったという。確かに栖霞洞の後ろ側には崩れた洞窟がある。現在も栖霞洞の傍らの崖を登っていくと、後ろの洞窟を望む場所にでることができるが、開いた天井の部分から見ると、奥行８m、高さ５mほど（いずれも目測）の規模であることが確認できる。この「第２の洞窟」が諸記録に登場する栖霞洞の本体であるかは断定できないが、少なくとも我々が通常見ることのできる栖霞洞はその一部でしかないと言うことができる。

ｅ．香山洞（Xianshan-dong）

香山洞は、栖霞山荘というホテルの背後に位置している。現在は栖霞山荘の敷地となっており、ホテルのロビーをいったん通り、裏口へ抜けるとそこに香山洞がある（写真10）。またホテルの外壁と洞窟との間隔は狭く２mもない。内部には祭壇（幅489×高さ94×幅44cm）が設けられており、石壁に刻まれた仏像を祀っている形跡は見られるが、現在ここに参る人はほとんどいないし、栖霞山荘としても特に祀るようなことはしていないという。

写真10．香山洞の入口

洞窟開口部は東南を向き、幅755×高さ320（単位はcmでいずれも最大値）であるが、写真でもわかるように石とセメントによる壁が設けられている。洞窟入口上部には「香山洞」と額が刻まれ、入口脇には「光緒癸卯」（1903年）の年号のある詩文が刻まれている。

洞窟の中は幅755×高さ365×奥行480（単位はcmでいずれも最大値）であり、杭州のなかでも小規模な洞窟である。古記録のなかにも、香山洞の名前は出てくるが、前掲の『春在堂随筆』に「香山洞甚浅、无可観覧。」と記されているように、ほとんど関心は払われていない。『西湖新志』には次のように見られるが、やはり簡単な記述である。

香山洞　在栖霞峰陽、岳墳后。洞身浅窄、不如峰後諸洞之邃而大。然禽市較近、挙足間即可一探其勝、初不必撥雲拾級也。〔『西湖新志』巻一〕

洞窟最奥部の石壁には２体の仏像が刻まれている（写真11）。１体は高さが１mの仏像である。頭部が壊されており判然としないが、後述の地元の人の話から考えれば観音像かとも思われる。また、向かって左側にはその随神像と思われる高さ55cmの仏像が刻まれているが、やはりこれも頭部が壊されてしまっている。

写真11．香山洞内部の祭壇

洞窟右壁には、半径約64cmの水場が設けられており、岩から染み出した水を湛えている。この水場の上には「観音水」の名が刻まれており、あるいは洞窟の祭祀に用いる水とされていたのかもしれない。

付近の人の話では、昔ここには観音像など３体の仏像が祀ってあったが、文化大革命の際に混乱を避けるために、霊隠寺の仏教協会に預けたという。その後これらの仏像がどうなったかはわからない。

また香山洞には、抗日戦争を戦い抜いた革命の闘士とされる

続范亭（1893－1947）の「尽此一報」の題刻がある。彼は一時栖霞峰香山寺内の香山精舎に滞在したことがあった。杭州を離れるにあたってこの四字を書き、人を頼んで香山洞の内壁に刻ませたものである〔馬　2003　53〕。

おわりに

以上のように、西湖北岸の洞窟聖地について論じてきた。冒頭にも述べたとおり、本稿で取上げることができたのは杭州のごく一部の洞窟にすぎない。しかし、この５箇所の洞窟聖地を概観するだけでも、次のような特徴を挙げることができるかと考える。

先ず一つに、かつては寺もしくは廟とともに存在していた洞窟があるということである。今回取上げたなかでは、黄龍洞と護国仁王寺、栖霞洞と栖霞廟・妙智寺、香山洞と香山寺がこれに該当する。また、本稿では取上げることのできなかった杭州市内の水楽洞、石屋洞などにもかつては寺があった〔『咸淳臨安志』巻二九〕。洞窟聖地がそれ単体ではなく、寺院等を伴って聖地化していることは日本列島や朝鮮半島の場合にも見られることであり、洞窟前面、もしくは入口を覆うように堂が設けられる場合が多い。

残念なことに、今回報告した洞窟はいずれもかつて寺や廟があったということを伝えるのみであり、現在その姿を見ることはできないが、今後洞窟の前庭の分析を行なうことによって、どのような規模の建物が存在したのかを明らかにするとともに、記録や伝承のさらなる調査から洞窟祭祀との関係性を考えていく必要があると思われる。

第二に、黄龍洞と紫雲洞における龍の伝説が挙げられる。龍が実際に棲んでいたとされるのは、今回取上げたなかでも最も規模が大きな紫雲洞であり、その火龍が麓の人びとを苦しめたという伝説があることは既に紹介したとおりである。また、紫雲洞が老黄龍、黄龍洞が小黄龍と、親／子の関係で結び付けられるとともに、火／水という対立の図式で語られていることも興味深い。この伝説が両洞の何らかのつながりを示している可能性もあろう。また、杭州市内においては他にも白龍洞や紫来洞など龍の伝説を有する洞窟があり、あるいは雨乞祈祷の対象として、あるいは人びとに災難をもたらす存在として龍が捉えられている。洞窟に対する人びとの信仰観を考えるうえで、龍の伝説についてさらに考えを進める必要があると考える。

ところで、このような洞窟と龍との関係は何も中国だけの問題ではない。たとえば黒田日出男は『龍の棲む日本』において、中世の日本列島には無数の「龍穴」が存在しており、それが龍・龍神の棲む洞穴と考えられていたことを指摘している〔黒田　2003　139〕。さらに黒田は、それら龍の棲む洞窟が互いにつながり合い、日本列島の地下を縦横に走る巨大な地下世界としてイメージされていたとしている〔黒田　2003　153〕。このような日本列島の「龍穴」の問題は、本稿で述べた中国における洞窟と龍との問題とも無縁ではない。東アジアの洞窟とその信仰を考えるうえで、龍は重要なキーワードとなりうるのである。

第三に、これも前述の龍とも関わる問題と思われるが、洞窟聖地と水との関係が挙げられる。今回取上げたなかで、全く祭祀の対象となった形跡のない洞窟があった。それは蝙蝠洞である。規模は紫雲洞には及ばないものの、栖霞洞や香山洞に比べれば数倍の規模である。洞窟は、単に広いというのみで聖地として認識されたり、祭祀の対象とされたりするものではないことがわかる。蝙蝠洞と他の洞窟を比べた場合、明らかに違う点が1点ある。それは水場の有無である。紫雲洞には洞内最奥部に「七宝泉」という水場がある。また香山洞の洞内にも「観音水」という水場が設けられている。栖霞洞は洞内に水場は無いものの、その前庭には豊富な地下水を利用した井戸がある。洞窟における水場の存在は、その洞窟の宗教的位置づけを考える上で決定的な要素となっているように思われる。

筆者が近年踏査した洞窟を考えれば、このことは朝鮮半島や日本列島の洞窟聖地にもかなり共通して見られるように思われる。たとえば韓国公州の西穴寺の石窟は、祭壇状になった壁面から水が染み出し、祭壇下の水場に水を湛えている。また日本長野県飯山の小菅神社奥社にも洞窟内部に「甘露水」という湧き水があるが、この湧き水自体が神聖視されており、目にすることすら許されない。これらはほんの一例に過ぎないが、この事例をみても、洞窟の水場の持つ重要性を知ることができるだろう。東アジアの洞窟祭祀と水場の問題をさらに検討するには、具体的祭祀の場における水場の機能をさらに分析していく必要があると考える。

第四に、観音信仰と洞窟の関係が挙げられる。紫雲洞の入口には観音殿があり、栖霞洞の祭壇には９体もの観音像が祀られている。また香山洞もかつては観音像を祀っていたと伝えており、石壁に刻まれている頭部を壊された仏像もあるいは観音像であるかもしれない。洞内には上述の観音水もある。また、本稿では取上げなかったが、杭州市内には「北観音洞」「南観音洞」など、洞窟の名前に観音を冠するものもある。

このような観音信仰と洞窟との関係について、論じるだけの力量を現在筆者は備えていない。中国も日本同様、もしくはそれ以上に観音信仰の盛んなところであり、地方の小さな廟や寺でも観音を祀るところは多く、家庭においても観音像を祀る家が多い。本稿で取上げたような観音信仰が、中国の一般的な観音信仰の延長線上にあるものなのか、それとも洞窟の信仰としての特質を有するものなのかの判断は、今しばらく留保しておきたい。

第五に、孟珙・慧開（黄龍洞）、高宗・賈似道（栖霞洞）、続范亭（香山洞）といった歴史上の著名人が各洞窟の伝説・由

来に登場していることを、今回論じた洞窟の特徴として挙げておきたい。もちろん全ての話が史実であったとは考え難いが、南宋以来、杭州という一大都市にさまざまな政治家、軍人、僧侶、文化人が訪れていたのもまた事実である。山中のほんの小さな洞窟の由緒にまで、このような人物が登場してくるというのは、杭州という特別な場所に位置する洞窟聖地の大きな特徴として記しておく必要があろう。

最後に――これは本稿の洞窟聖地をどのように捉えていくかという大きな問題とも関係することであるが、中国の「洞天福地」思想について触れておきたい。

窪徳忠によれば、洞天福地とは「道教関係の霊地で、修行するのに大へんよい場所」で、

> 天地名山の間にあり、上天の遣わした群仙の統治する『十大洞天』、多くの名山のなかにあり、上仙が統治する『三十六小洞天』、および大地名山の間にあり、上帝が真人に命じて治めさせている『七十二福地』の三つに大別されている。

と説明する〔窪　1980　98〕。このうち「十大洞天」と「三十六小洞天」はいずれも「〇〇洞」という名がついている。三浦國雄が「洞天の観念は、中国の諸名山に実在する奥深く巨大な洞窟から生まれたもの」〔三浦　1995　102〕と論じるように、これらの聖地は洞窟の形をとるものであった。

洞天福地は、中国国内各地に分布しているが、なかにはその所在を画定できない箇所もあるという〔田中　2002　25〕。また、田中文雄によれば現実のこれらの土地には一定の形式があるとされており、それは「きわだってそびえる山岳と、その麓の土中に洞穴があり、そこには良質の水がある。」〔田中　2002　25〕というものである。

ところで、このような洞天福地思想は、唐代になって整理され体系づけられたとされるが、三浦はその成立を次のように考えている。

> その（洞天福地思想の――筆者注）成立は実はもっと早く、またその成立に至るまでには、古代的な地母神信仰、山岳信仰、冥府としての地底観念、隠者の棲み家としての石室、「洞庭」や「地肺」などの大洞窟に関する伝承、あるいはユートピア願望といったさまざまな要素が介在していたにちがいない。〔三浦　1995　88〕

さて、ここで洞天福地思想について触れたのは、本稿で論じたような洞窟を、「小さな洞天福地」として捉えることができないかと考えたためである。上記の研究者が取上げた洞天福地はいずれも中国の聖地としては最上の部類に位置するであろう。しかし、人びとの身近な地域にも、この洞天福地思想を底辺で支える無数の「小さな洞天福地」があったと考えられないだろうか。本稿で取上げた５つの洞窟は、いずれも市街地から近く、市民が裏山気分で散歩をするような場所に位置している。広い中国大陸の「名山」に位置する洞天福地は、人びとにとって距離的にも心理的にもあまりに遠い存在である。このような「小さな洞天福地」の存在が、実際の「洞天福地」思想とどのような関係にあったのかは、なお検討の余地があるが、このことは「洞天福地」思想が民俗宗教にどのような影響をもたらしたのか、逆に民俗宗教に「洞天福地」思想を成立させるどのような要素があったのかという課題の解明につながるものであると考える。

註

（1）もちろん同書に記載されているのは西湖周辺の洞窟のなかでも一部の著名な洞窟聖地のみであり、実際にはこの倍以上の洞窟聖地が存在すると思われる。

（2）なお、筆者も常盤が報告した洞窟の踏査も行なっており、常盤の報告との照らし合わせ作業を継続中である。その成果については、次稿以降で報告したい。

（3）たとえば、韓国海印寺の「金剛窟」は、寺のような建物である。ここは尼僧が共同生活を送る修行施設であり、同寺の僧侶は「『窟』は『庵』よりも小さな寺」と認識している。また、九州英彦山四十九窟の一つ「鶯窟」も、窟とは名のみで実際には岩陰から噴き出している「圓通滝」のことを示している〔山本　2002　7〕。

参考文献

窪徳忠　1980　「道教と山岳」〔『現代宗教』２山岳宗教　春秋社〕

黒田日出男　2003　『龍の棲む日本』　岩波新書

杭州市文化局（編）北沢功（訳）　1992　『杭州の伝説』（原題『杭州的伝説』）　随想舎

下中彌三郎（編）　1986　a　(1937)　『東洋歴史大辞典』上　平凡社

下中彌三郎（編）　1986　b (1937)　『東洋歴史大辞典』下　平凡社

須永敬　2003 a　「朝鮮半島の山と宗教――山岳宗教からみた『日本』と『韓国』」〔笹本正治（編）『修験道と飯山』　ほおずき書籍〕

須永敬　2003　b　「沖縄本島の聖地とその研究に向けて」〔『「日本における神観念の形成とその比較文化論的研究」研究報告』　國學院大學21世紀ＣＯＥプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」平成14年度研

究報告書 別冊〕
田中文雄　2002　『仙境往来』　春秋社
常盤大定　1972（1938）『支那佛教史蹟踏査記（全）』　国書刊行会
常盤大定　関野貞　1975　『中国文化史蹟』4　法蔵館
常盤大定　関野貞　1975　『中国文化史蹟』解説上　法蔵館
三浦國雄　1995（1988）『風水―中国人のトポス』　平凡社ライブラリー
山本義孝　2002　「『彦山流記』に記された窟の世界」〔『山岳修験』29〕
王仲奮（編）　2003　『中国名窟名洞辞典』　中国旅游出版社
杭州市文化局（編）　2000　『西湖民間故事』　浙江文芸出版社
馬時雍（編）　2003　『杭州的山』　杭州出版社

資料

『無門関』宋：慧開　1228年成立（西村恵信（訳）　1994　岩波文庫）
『咸淳臨安志』宋：潛説友（纂）1268（咸淳4）（中国地誌研究会（編）『宋元地方志叢書』7　1978　中国地誌研究会）
『東方見聞録』（愛宕松男訳注『東方見聞録』2　1971　平凡社）
『西湖游覧志』明：田汝成（撰）1547（嘉靖26）第九巻（1983『景印文淵閣四庫全書』571　臺灣商務印書館）
『西湖臥游図題跋』明：李流芳（撰）（清：光緒７刊）（1999　上海古籍出版社）
『湖山便覧』清：翟灝等（輯）　1765（乾隆30）（1983　『中國方志叢書』華中483　成文出版社）
『湖壖雑記』清：陸次雲（光緒年間）（1999　上海古籍出版社）
『春在堂随笔』清：兪樾　1899（光緒25）（1999　『清波小志』　上海古籍出版社）
『西湖新志』民国：胡祥翰（輯）1921（1998　『湖山便覧』　上海古籍出版社）

謝辞

中国杭州市での現地調査においては、浙江工業大学外国語学部学生の許倩、黄巧巧、孫青青、李蕾の各氏に通訳の労を執っていただいた。雨の日が続いてぬかるんだ山道や、洞窟の蚊や蝙蝠にめげることなく、懸命に通訳をしていただいた。心から感謝申し上げる。

（提出期日　平成16年11月26日）